

— 一定例総会記念講演 —

「障害者権利条約を学ぼう～地域であたり前にくらししていくために」  
を聞いて

Aさんは、私が学生の頃出会った、脳性まひの障害を持つ男性でした。施設生活を余儀なくされていた時代に、地域であたり前に暮らしたいと、それこそ命がけで施設を飛び出し、「健常者」の奥さん、子供と生活していました。そこには多くの様々な障害を持つ人たちや支援者が出入りし、家族としてのプライバシーはほぼない状況でしたが、何としてもAさんやその仲間を支えていくという熱気がありました。言語障害の強いAさんは、こちらが聞き取るまで何度でもふり絞るように繰り返し伝えようとしてくれ、泣きそうになりながら長い時間かけて単語 1 つといったこともありました。また、当時は駅にエレベーターはなく、外出時階段下で通りすがりの人に大きな声で「すみませ～ん、手伝って下さ～い」と頼み、数人がかりで車いすごと上げるのです。今は駅員が通常のサービスとして対応していますが、車いすのずっしりした重みを見知らぬ人とわかち合う機会がなくなったことは、ちょっとさびしい気もします。当初からAさんは最寄り駅にエレベーター設置を強く要望する活動を続けていましたが、実現されるまでに20年以上の歳月が流れていました。

記念講演での斎藤なを子さんのお話は、Aさんを始め、これまで会った多くの障害を持つ人たちを改めて思い起こし、障害者権利条約の説明を通して、障害のとらえ方や、わけへだてのない社会をめざすために何が必要かを、わかりやすく示してくれていました。戦争のさなか、あのナチスドイツだから引き起こされたと思っていた障害者やユダヤ人の大量殺りくと、ほんの2年前、現代のわが国で、相模原市の津久井やまゆり園の19人が犠牲となっただけの事、この「障害者を生きるに値しない存在」とする優生思想といわれる考え方で一致するとは、本当に怖いことです。

「一部の人々をしめ出す社会は弱くもろい社会である」「障害のある人の側から考える」「本人の中に問題を閉じ込めない」などのキーワードを胸に刻みつつ、襟を正して歩んでいきたいと思ったひとときでした。

(ケアプランえん／西崎麻子)

